

**実社会との接点を重視した課題解決型学習プログラムに係る実践研究
実施方法等**

1. 実践校について

実践校名	(ふりがな) わかやまだいがくきょういくがくぶふぞくしょうがっこう 和歌山大学教育学部附属小学校		
学科名	児童数	学級数	
	571	21 学級	

2. 実践研究の対象

4 年 27 人 1 学級

5 年 90 人 3 学級

5・6 年複式 14 人 1 学級 計 131 人 5 学級

3. 実践研究の実施経過

【4月】

① 1 年次を受けて学習プログラム構築の理論を基に新たな学習プログラムを構想する。

- 地域課題の教材化の視点を明確化にもつ。
- 地域社会と目的を共有するとともに、相互に利点がある取り組みを行う。
- 課題設定、追究（情報収集、整理分析）、社会参画（まとめ・表現）の学習プロセスを重視する。

【5月～12月】

② 研究理論を生かした指導を行い、適宜反省をしながら、実践を重ねる。

3つの学習プロセス毎の要件を満たすよう、指導計画を立て実際の指導を行う。実際の指導が「よりよい社会の形成に参画する子」を育てることができているかについて検討し、指導上の成果と課題を明らかにする。明らかになった指導上の成果と課題を次の指導に生かす。

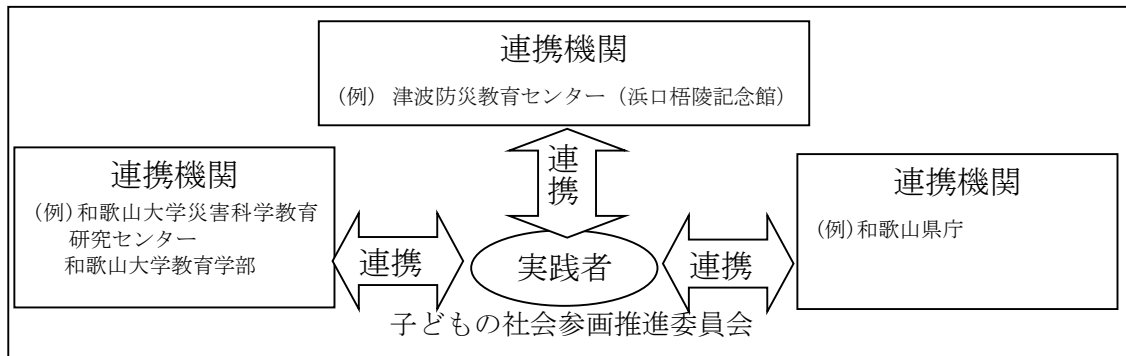
【1～2月】

③ 研究の成果と課題を明らかにする。

学習プロセスごとの要件が研究テーマに掲げるような授業づくりに効果的であるかについて、児童に対する質問紙調査の結果から検討し、成果と課題を明らかにする。

4. 実践研究の実施体制

(例は「津波災害対策本部」の学習のもの)



- ※ 子どもの社会参画推進委員会は単元によって連携機関が異なるためメンバーが入れ替わる。例は「津波災害対策本部（「自然災害から人々を守る」）」のもの
- ※ 「連携」は、実践者の教材研究、子どもの校外学習、出前授業、「地域課題の解決に向けた活動」などにおいて協力することを意味する。
- ※ 上記以外の今年度の他の連携機関は、和歌山市役所（環境部）、和歌山市役所（観光整備課）、和歌山城内動物園、和歌山市加太漁業協同組合、花王株式会社、公益財団法人日立財団、株式会社日立ソリューションズ、スターバックスコーヒージャパン、和歌山県庁（防災企画課）、大阪ガス（株）、劇団 ZERO、和歌山大学木川教授、東京芸術大学伊藤教授である。

5. 教育委員会等として取り組んだ内容

上記例に挙げている「津波災害対策本部（「自然災害から人々を守る」）」の単元においては、和歌山大学教育学部防災教育担当教員を通して、本学災害科学教育研究センターに所属する教員の中から、小学校における防災教育の支援、指導に最適であろうと考えられるセンター教員を紹介してもらった。また、大学の人材に関しては教育学部以外の教員に対しても専門的知識の提供を依頼した。

「環境に配慮した生活」の学習時には、同教育学部家庭科教育専攻の教員が授業や企業（大阪ガス(株)HugMuseum）での取り組みに参加し、体験学習後の授業実施に際し、映像教材を提供した。

報告書に添えた、ハンドブック作成についても全面的に協力した。

実社会との接点を重視した課題解決型学習プログラム（概要）

実践校名：和歌山大学教育学部附属小学校

概要

子どもが実社会に現実に存在する問題の解決に向けて考えたり、行動したりする活動を通じて、よりよい社会の形成に参画する力（社会形成力）を育む学習プログラムを開発する。

学習プログラムの目標

- よりよい社会の形成に参画する力である社会形成力を育む。
社会形成力は以下の3つの力から成る。

社会にかかわる力	公正な判断力	社会認識
・ 仲間と協働しながら、地域とつながり、社会の一員としてよりよい社会の形成に向けて自分（たち）のできることを考え、実践しようとする力	・ 仲間と協働し、多面的・多角的な視点で社会的事象をとらえ、考察しながら、問題の解決に向けて意思決定や価値判断を行う力	・ 自分（たち）と社会とのつながりを実感し、社会的事象の価値や意味、特色や傾向がわかる力

学習プログラムの主な内容

学習プログラム（1）加太の鯛応援隊（第4学年社会科）

地域漁師と関わり、地域特産物「鯛」のすばらしさや、それを支える自然環境や漁師の持続可能な取り組みを知った子どもたちが「鯛を脅かす問題」の解決に向けて、知恵を出し合い、解決策を発信する活動を行った。

① 地域の特産物「加太地区の鯛」

地域の特産物として「加太地区の鯛」があることを知る。

② 調査活動（フィールドワークも含む）

加太地区へ行き、漁師から、加太の鯛が育まれる自然、とるだけでなく守る、売る、PRも漁師がしていることなどについての話を聞く。また、「（漁師が資源管理をしながら、漁をする一方で）釣り観光客が鯛をとり過ぎる問題」があることを知る。

③ 「釣り観光客が鯛をとりすぎる問題」についての解決策を探る（話し合い）

「ルールづくり」、「観光客への啓発」、「関係者の連携」などの視点から問題に対する解決策を話し合う。

④ 問題解決策をポスターにまとめ、漁師（漁業協同組合）に発信する。

ポスターの内容を漁業協同組合の方に見てもらい、意見・感想をもらう。その後、漁業協同組合の施設に掲示してもらう。

学習プログラム（2）海洋プラスチック問題対策本部（第4学年社会科）

行政との連携により「市のプラスチックごみの処理」を、企業連携により「プラスチックごみ減量に向けた取り組み」を調査するという活動をとおして、世界的な問題であるプラスチックごみ問題の解決に向けて、自分たちができることで協力しようとした。

学習プログラム（3）津波災害対策本部（第4学年社会科）

県庁防災企画課のスローガン「津波による犠牲者ゼロ」の実現のため、和歌山県の現状を知り、対策を考えて地域に発信する活動をとおして、自分たちも減災に向けて必要な備えをするなど、できることをしようとした。

学習プログラム（4）環境に配慮した調理（第5学年家庭科）

大阪ガス(株)HugMuseum でエコクッキング実習を体験し、水・ガス量やゴミ重量を数値として確認し、その後の調理実習において、環境に配慮した調理を行うことができる知識・技能を身につけた。

学習プログラム（5）学校改革 ～みんながイノベーター～（第5・6学年複式総合的な学習の時間）

企業や落語家のアドバイスを継続的に受けながら、自分たちの生活をふり返り、日常の中に楽しみを見つけ、その楽しみを少しでも多くの人に広げる活動をとおして、学校で生活する一員として学校や仲間に対する親しみや愛情を深め、自分の生き方を考えることができるようにした。

学習プログラム（6）和歌山城 PR プロジェクト（第5・6学年複式総合的な学習の時間）

行政、劇団員、大学教授などとの連携により、和歌山城の調査活動を行い、和歌山城の魅力伝える映像制作を行う活動をとおして、地域の一員として親しみと愛情を深め、自分の生き方を考えることができるようにした。

学習プログラムの成果の概要

- 実社会にある本物の問題を扱うことで、子どもたちなりに社会を捉え、社会にかかわり、自分たちができることを考え実行し、連携で関わった大人と共に問題を解決しようとする意欲の高まりや具体的な姿が見られた。
- 教材に関する専門的な知識を豊富にもち、尚且つ実社会の問題を解決しようとする努力している個人や機関と連携することにより、問題解決に必要な知識を豊富に得られたことから、子どもたちが考えた問題の解決方法が机上の空論ではなく、現実的で実現可能なものに近づいていく様子が見られた。
- 学習プログラムのまとめとして「提案・発信」する学習過程を位置付けることで実社会の問題を解決しようとする態度や実社会の問題を解決するために様々な方法を考える姿が見られた。県教育委員会主催の〈ふるさと和歌山学習大賞コンクール〉では、4Aは「加太の鯛応援隊」の提案をし、模造紙部門大賞を、5、6Fは「和歌山城PRプロジェクト」の提案により映像部門の奨励賞をそれぞれ受賞した。